

## 東京大学見学会企業大学訪問感想文

私は今回の東京大学・企業見学会で、自分の今までの、将来への展望の甘さに気づかされ、これからとるべき行動について深く考えさせられた。以前までの私の将来への展望は、将来したいことが決まっていなかったため、いつか自分の目標ができた時、既に手遅れ。という状況にならないよう、とにかく勉強をしておけばいい。というものだった。だが、一日目の夜に行われたOB・OGとの懇談会で、今の時点でこの考え方をしているようでは遅いのだと気づかされた。もう、自分の将来への見通しをたてて、行動に移していかなければいけない段階に来ているのだ。自分達a班は、裁判官・弁護士・検察官など、司法関係の職業を志望する人の班だったため、一日目は、午前中のディレクトフォースでは「新日鉄住金」、午後の企業訪問は「アディーレ法律事務所」に訪問し、夜にはOB・OGとの懇談会があった。

ディレクトフォースでは、仙台二高のOBの先輩方の話を聞くことができた。「企業に就職した時に役立つ、学生時代の経験」について自分達の意見を発表し、その意見に関するアドバイスを頂いた時は、自分の考え方は間違っていないが、別の考え方もあるのではないかと、例を出され、自分もその例に納得し、とても嬉しかった。この時、本当にこの行事に参加してよかったと思った。

企業訪問では、実際に弁護士の方の話を聞くことができ、とても貴重な経験ができた。弁護士が担当する案件の種類や、弁護士を志したきっかけ、やりがいを感じる瞬間など、普段の生活の中ではなかなか聞けないような話をたくさん聞き、今まで詳しく知らなかった職業についての知識を得たり、自分のモチベーションを上げるきっかけとなったりなど、実に充実した時間になった。お話の中で特に中で印象的だったのは、三つあった。

一つ目は、「仕事をする上での流儀は何か」という質問に対する答えが、「どんな時でも、誰に対しても優しくすることを心がけている。」というものだったことだ。依頼人は基本、不安な気持ちや、苦しい気持ちを抱えながら相談してくるケースが多いため、まずは気持ちを軽く、楽にしてもらい、心を開いてもらうため、安心させるのだという。そのためにも、常日頃から、相手の心を和ませる練習も兼ねて、どんな人にも優しくしておくのは、とても大切なことだと聞いて、常に周囲に気を配るという心構えは、簡単そうでとても難しいことなんだろうなと思った。

二つ目は、「高校時代の内にやっておくべきことは何か」という質問に対する答えが、意外にも「実は特にはない」というものだったことだ。実際、こういう特別な勉強をすれば弁護士や検察官になれるというものはなく、最も重要視されるのは「学歴」や「司法試験に合格した年齢」など、人としての評価や信頼に繋がる要素らしい。それを考えると、先ほどの「人に優しくする」というのも、依頼人の評価や信頼を得る大切な要素の一つなのかもしれないと思う。

三つ目は、「弁護士という職業にやりがいを感じるのはどんな瞬間か」という質問に対する答えが、「依頼人の笑顔を見ることができたとき」というものだったことだ。先程述べたように、初めは不安を抱えていて、暗い表情の依頼人が、弁護士の話を聞いて、少しずつ、少しずつ緩やかな表情に変わっていき、案件もこちらに有利になるにつれて、徐々に明るい表情を取り戻す。依頼人のそのような表情が垣間見えた瞬間が、弁護士にとっての幸せ。夜中に資料を集めたり、地味な仕事をしているときは辛いが、人の笑顔の為なら頑張れる。というようなお話を聞き、とても感動した。やはり、弁護士や検察官に限らず、どんな職業においても、他人に対する情や、一人の人間としての思いやりをしっかりと持っているという前提での「働く」ということなんだと思う。

その後、普段仕事をしている事務所の中を案内していただいた。法律事務所というと、なんだか堅苦しく、オフィスも殺風景なのではないかという固定観念が自分の中にあっただが、全くそんなことはなく、椅子の色がカラフルだったり、机が広く、きちんと整頓されていたりなど、とても快適な環境に見えた。自分もこのような所で働きたいと思った。

夕食後のOB・OGとの懇談会では、主に仙台二高を卒業して、東京大学に進学した三人の先輩のお話を聞くことができた。

一人目の先輩は、理系で、工学部に進学された先輩だった。自分は文系で、法学部か経済学部に進もうと考えているため、あまり参考にならないと思っていたのだが、話がとても面白く、聞いているうちにどんどん引き込まれ、結果とてもいい参考になった。あまり自分に関係がないと思うような人のアドバイスでもお話でも、どこかで必ず自分のためになるのではないかと思うようになった。

二人目の先輩は、文系で、法学部に進み、今は大学院生の先輩だった。法学部ということで、意識して聞いた。その先輩は、弁護士になるために勉強しているらしく、自分が、「検察官という選択肢はないのか」と質問すると、「弁護士のほうが自分のやりたいことができるから、弁護士になりたい」という答えが返ってきた。検察官は、人や企業に雇われてする仕事だが、弁護士は、ある程度実力や実績があれば、自分自身で事務所を立ち上げ、自分の好きなように仕事をすることができる。自分も、その点は弁護士と検察官の大きな違いの一つだと思う。

三人目の先輩は文系で、経済学部に進学された先輩だった。経済学部についてより知ることができる大きなチャンスだった。その先輩には、高校一年生、つまり自分達と同じ目線の高さで話をして頂き、とてもわかりやすかった。その場にいた一人一人の志望している文理や学部を尋ね、それぞれにアドバイスしていただいた。自分の場合は、本気で弁護士・検察官を目指すなら二年生から文系を選択し、三年生でもそのまま文系で、大学では法学部に進むべき。また、まだやりたいことが決まっていなくて、職業の幅が広がる経済学部に進みたいなら、二年生で理系を選択し、三年生で文転するという手もある。という、自分の現段階から逆算して見通しを立てやすくするととてもいいアドバイスをいただけた。

二日目は、朝から夕方まで、東京大学のオープンキャンパスを見学した。自分は、午前中に「学部紹介」で法学部、経済学部についての紹介を聞き、午後は、経済学部の講義を受けた。法学部の紹介では、主に、法学部出身の人は卒業後どう進むのかについての話だった。それは大きく分けて二つに分かれる。一つは、卒業後すぐに民間企業に就職し、弁護士などの傍で仕事をする人。もう一つは、法科大学院に進学し、司法国家試験に向けて勉強を続ける人だ。弁護士や検察官になるためには、この試験に合格しなければならない。この試験を受けるためには、大学院に行かなければいけない。つまり、弁護士になるには、最も早くても大学院を卒業する二十五歳まで勉強しなければいけないということになる。だがこの試験に受かる保証などどこにもなく、途中で諦めたとしても、就ける職種も限られてくるため、ある意味賭けのようなものかもしれない。だが、東京大学法科大学院では、講義の中で「模擬裁判」というものがあり、この講義の既修者は、未既修者に比べ、司法試験の合格率が約10%高いという結果が出ていると知り、東大の凄さを改めて実感した。

自分は、まだ将来やりたいことが決まっておらず、自分にどんな職業が適しているのかもよくわからないが、今回の、ディレクトフォースから東大見学までの貴重な体験を通して、少なくとも今現在すべきこと、これからの長い人生で、大切にすべきことについて考えるきっかけを与えられた。そしてそのきっかけを将来に活かしていく基盤は、きっと高校三年間での生活の中で作られるのだと思う。少しの油断や妥協が、一度きりの人生を棒に振ってしまうことにも繋がり兼ねない。このことを肝に銘じて、後悔だけはしないよう、有意義な高校生活を送っていきたい。

最後に、この行事を企画、運営していただいた先生方、貴重な体験を通して共に学んだ班のみなさん、本当にありがとうございました。